

ハマグリの有効な資源管理手法は？

～ハマグリはどのくらいで大きくなる？～

浅海干潟研究部 生嶋 登

はじめに

全国でも有数を誇る熊本県のハマグリ (*Meretrix lusoria*) 漁獲量は、昭和 49 年の 5,855 トンをピークに減少を続け、平成 16 年には 50 トンと過去最低を記録しました。平成 17 年は 65 トン、平成 18 年は 110 トン (概数) と回復の兆候が見られますが、今後も安定的に漁獲を継続するためには資源管理の取り組みが重要です。しかし、本県ハマグリの生態は不明な点も多く、有効な資源管理手法はまだ確立されていません。

本報告では、ハマグリ資源管理手法確立の基礎資料とするために、県内の主要ハマグリ生産地である緑川及び白川河口域において平成 18 年度から実施しているハマグリ成長把握調査の結果について報告します。

調査の概要

浮遊幼生調査

緑川河口域において、平成 18 年度は 6 月から 10 月まで月 2 回、平成 19 年度は 6 月から 8 月まで週 1 回調査を実施しました。

定期サンプリング調査

緑川河口域の 3 定点、白川河口域の 7 定点において 1mm 目合いの篩を用いた粹取りを毎月 1 回おこない、得られたハマグリの殻長組成の推移から成長を調査しました。

飼育試験

緑川河口域および白川河口域において、殻長 10～20mm、20～40mm、40mm 以上に分類したハマグリをサイズ別に飼育かごに収容し、飼育試験を実施しました。ハマグリには個体識別用のマーキングを施し、1～2ヶ月に 1 回殻長を測定しました。

調査の結果

浮遊幼生調査

浮遊幼生は、平成 18 年度は 8 月、平成 19 年度は 7 月下旬から 8 月下旬の調査で確認され、ハマグリが両年とも 7 月下旬から 8 月にかけて産卵したことが確認されました。

定期サンプリング調査

平成 18 年 4 月の調査で、殻長 2～4mm を主体とする稚貝が確認されました。これらは、平成 18 年 10 月には成長の早い群が殻長 21mm 前後、遅い群が殻長 11～15mm 前後に成長しました。冬期には大きな成長は認められず、平成 19 年 7 月にはそれぞれ殻長 32mm 前後、殻長 26mm 前後に成長したと推察されました。一方、平成 18 年 9 月の調査で、平成 18 年夏期発生群と推察される殻長 1～2mm を主体とした稚貝が確認されました。

これらは 10 月以降大きな成長は確認されず、稚貝は殻長 2～4mm 程度で越冬していることが推察されました。なお、殻長 20mm 以上については個体数が少なく、本調査では明確な成長の傾向は把握できませんでした。

飼育試験

緑川河口域では大雨による出水の影響で、平成 18 年 9 月から翌年 6 月までの試験となりました。期間中の平均累積成長は殻長 10～20mm が 5.5mm、殻長 20～40mm が 5.8mm、殻長 40mm 以上が 2.8mm で、定期サンプリング調査と大きく異なる結果となりました。この要因として夏期の成長期を前に調査が終了したこと、試験地が河口直下で流速が早く、河川水の影響を受けやすいなど、飼育環境が厳しかったことが考えられました。

白川河口域では平成 18 年 7 月から試験を開始しました。平成 19 年 7 月まで 1 年間の平均累積成長は、殻長 10～20mm が 22.6mm、殻長 20～40mm が 15.4mm、殻長 40mm 以上が 10.2mm であり、殻長 10～20mm の成長は定期サンプリング調査とほぼ同様の成長でした (図 1)。

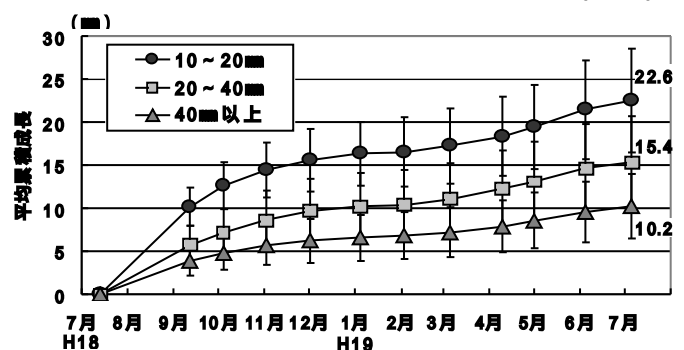


図 1 飼育ハマグリの平均累積成長の推移 (白川)

まとめ

今回の調査結果から、ハマグリの産卵期は夏期 (7～8月) であること、最低漁獲サイズ (殻長 30mm より大) に成長するのは発生から約 2 年後、翌々年の梅雨期頃であることがわかりました。ハマグリが産卵をする最低のサイズは殻長 30～40mm 以上といわれており、殻長 30mm より大きいハマグリを通年漁獲する現在の漁業形態では、再生産に加入する前のハマグリを随時漁獲している可能性が高いと考えられます。そのため、近年回復傾向にあるハマグリを今後も安定的に漁獲していくためには、成長と産卵期を考慮した資源管理の取り組みが重要です。

具体的な取り組みとして、夏期産卵期 (7～8月) の漁獲制限、漁獲サイズの大型化 (殻長 40mm 以上) 等を実施していく必要があります。